

第3章

震災を忘れないために

副読本
24～25ページ

年 組 番 氏名

1

今日の学習で思ったことや考えたことを書きましょう。

震災を忘れないために

平成23年3月11日。私は当時、小学4年生でした。私はこの時、あんな恐怖がおとずれるとは、思ってもみませんでした。時計の針が、午後2時46分を指した時、突然ゴゴゴッ・・・という低い音が耳に入ってきたのです。「何だろう」と思った瞬間、教室中が激しいゆれにおそわれました。棚から落ちる本やノートなどが、教室の中でどんどんぐちゃぐちゃになっていきました。その後、けたたましい音のサイレンが鳴り、「大津波警報。早く海から離れて下さい。」との放送が町中に響いていました。「・・・大津波？」私はその時、津波に対してあまり実感がありませんでした。でも、私が見た津波は、私の想像をはるか超えた、とても恐ろしいものでした。津波が車を、木を、町をのみこんでいく・・・！

海の水が引いた後、変わり果てた町並みが私の目にとびこんできました。たった数分前まで見ていたはずの建物が、木が、町並みが、ないので。でもそれはまぎれもなく、私たちが住んでいた故郷でした。あの地震、あの津波、あの恐怖。私たちの町は、一瞬にして壊れてしまったのです。でも、震災は何もかも奪っていったのでしょうか。いいえ、違います。震災は、私たちに生きる知恵と、人々のありがたみと温かさを教えてくれました。

震災が起こる前までは、私は自然災害をまるで他人事のように

思っていました。「どうせここは大丈夫。津波なんて、そんなに高い波が来るものじゃないだろう。」と。そのうえ、どこかで災害が起こっても「かわいそうに」くらいにしか思っていませんでした。でも、震災を機に、その考えはまちがっていたことに気づかされました。さらに、1か月以上の水、電気のない生活で、あらためて普段の生活のありがたみを感じました。

町・心の復興を進めるためには、みんなで手を取り合い協力していくべきだと思います。例えば、地域全体で防災意識を高めるためのイベントを行ったり、防災マップを配布したり、学校行事に地域の方を招いて交流をしたり、自分が役に立てることを積極的に行っていきたいと思っています。私は、必ず気仙沼の復興を実現させてみせます。私たちの故郷が、とてもすてきて温かい町に戻るのを信じて。

(2014年3月 宮城県気仙沼市立学校長会・気仙沼市教育委員会・宮城教育大学発行 「被災から前進するために 第3集」より)



津波の被害を受けた町（気仙沼市）